

# 縮約形の助動詞化について

島田雅晴

## 1. はじめに

現代英語において助動詞が疑問文、否定文、動詞句削除構文で一般動詞とは異なるふるまいを見せることはよく知られた事実である。

- (1) a. Will John come here?  
b. \*Came John here?
- (2) a. John will not come here.  
b. \*John left not here.
- (3) a. John will come here and Bill will, too.  
b. \*John came here and Bill came, too.

疑問文では助動詞は主語と倒置を起こすが、一般動詞は起こさない。否定文では助動詞は否定辞に先行するが、一般動詞は先行しない。動詞句削除構文では助動詞は主語とともに生起するが一般動詞は生起しない。これらの違いはそれぞれ上記 (1) から (3) に例示されている。つまり、疑問文で倒置を起こす要素、否定文で否定辞に先行する要素、動詞句削除構文で主語とともに残る要素は文法的に同じ類をなす要素と分類でき、そうでない要素はそれらでまた類をなすと考えられるのである。

ところが、英語以外のヨーロッパ言語に目を転じるとこの分類が必ずしも事実をうまく捉えているようには見えないことがある。例えば、ドイツ語では (4) に示すように疑問文形成、否定文形成では英語の一般動詞にあたる述語も倒置を起こしたり、否定辞に先行したりする一方、(5) に示すように動詞句削除構文では英語の助動詞にあたる述語であっても主語とともに残ることはない。

- (4) a. Sie spielt Klavier.  
She play piano

- ‘She plays the piano’
- b. Was spielt sie?  
‘What does she play?’
- c. Sie spielt nicht Klavier.  
‘She doesn’t play the piano.’
- (5) a. \*Hans wird heimfahren und Marie wird auch.  
Hans will drive home and Maria will too
- b. \*Hans hat geschlafen und Peter hat auch.  
Hans has drive home and Peter has too (Lobeck (1999))

つまり、ドイツ語ではどのような動詞類も疑問文で倒置を起こしたり、否定文で否定辞に先行する一方、どのような動詞類も動詞句削除構文で生起することはない。このように、動詞類を助動詞と一般動詞に分類するという現代英語を説明する体系がドイツ語には当てはまらないかのようにみえるのである。

このような言語間の差異を島田 (2004) では極小理論の素性にもとづく分析を援用して説明している。本稿では基本的にその分析を踏襲する。そして、異言語間ではなく、現代英語という同一言語内でも (1) から (3) にみられるような規則的な分布を示さないことがあるという Okazaki (2002) の指摘と観察をとりあげ、それに対する説明を試みる。本稿の構成は次のとおりである。2 節では島田の分析を概観する。3 節では Okazaki の観察を紹介する。4 節では島田の分析で Okazaki の観察をどのように説明できるかを論じることにする。5 節はまとめである。

## 2. 島田 (2004)

本節では前節で指摘した現代英語とドイツ語の動詞類のふるまいの違いが島田 (2004) でどのように説明されているかを概観する。島田では疑問文、否定文、動詞句削除構文は意味的に一つの類をなすものと考えている。どのような意味で類をなしているかという点、3 者とも真理値に関する文であるにとらえるのである。例えば、yes-no 疑問文が典型的であるが、これは命題内容が真か偽かを問うものといえる。また、否定文も偽であることを明言する文であり、動詞句削除構文も前出の動詞句の意味内容がここでもあてはまる、つまり、ここにおいてもまた真である、ということ述べた文である。このようなことか

ら、これら3つの構文は真理値に関して何らかの情報を与えることを目的としている点で同じ類をなすと考えているのである。

島田によれば、この共通性はこれらの構文の主節を構成する機能範疇 C, T (ense) にその理由を求めることができるという。島田は Solà (1996), Laka (1990), Roberts (1998) らの分析を援用し、これらの構文の C や T には  $\Sigma$  素性と呼ばれる素性があると仮定した。この素性は問題となっている文が真理値に関する文であることを保証するもので、かつ解釈不可能なため除去される必要がある素性とされている。

例えば、次のような疑問文を考えてみる。

(6) Do you love Nancy?

島田はこの文はおおよそ次のような構造から派生すると仮定する。

(7) [<sub>CP</sub> C( $\Sigma$ ) [<sub>TP</sub> T [you love Nancy]]]

ここで、C( $\Sigma$ ) という表示は、この C は  $\Sigma$  素性を担っている、ということの意味する。つまり、これがこの文が疑問文であることを保証しているのである。しかし、この素性は解釈不可能であるため、つまり、PF で残ってはいけな破綻をきたすため、それを除去すべく助動詞の do が挿入されるのである。その結果、(6) のような文が派生されることになる。

否定文、動詞句削除文も同様に分析される。

- (8) a. John does not love Nancy.  
b. [<sub>TP</sub> T( $\Sigma$ ) Neg [John love Nancy]]

- (9) a. John loves Nancy and Bill does, too.  
b. [<sub>TP</sub> Bill T( $\Sigma$ ) [<sub>VP</sub> e ]]

(8a) の否定文はもとは (8b) の構造で T に  $\Sigma$  素性がある。この素性を削除すべく助動詞の do が挿入される。また、(9a) の動詞句削除構文はもとは (9b) であると仮定される。空の VP は LF で再構築されるが、PF では T に  $\Sigma$  素性があるとはいけないので、それ以前に助動詞の do が挿入されるのである。

助動詞とは、この分析に従えば、自身も  $\Sigma$  素性をもち、機能範疇が担ってい

る $\Sigma$ 素性を削除できる要素ということになる。よって、島田は現代英語の助動詞と一般動詞の相違は $\Sigma$ 素性を持つ述語かどうかということにあると論じているのである。さらに、このように考えると現代英語とドイツ語の相違を説明することが可能になるという。ドイツ語の述語はなんであれ疑問文や否定文で前置されるわけであるが、それはドイツ語の述語はすべて $\Sigma$ 素性を担っていることを意味する。つまり、(10) (= (4b)) の spielt は $\Sigma$ 素性を担っているのでCの $\Sigma$ 素性を削除すべく前置されているのである。

- (10) a. Was spielt sie?  
 'What does she play?'

しかし、このように考えると動詞句削除構文について問題が生じる。ドイツ語では(5)にあげたように動詞句削除構文は不可能であるが、すべての動詞が $\Sigma$ 素性を持っているならば当然ドイツ語でもすべての動詞に関して動詞句削除構文が可能になるはずである。

- (5) a. \*Hans wird heimfahren und Marie wird auch.  
 Hans will drive home and Maria will too  
 b. \*Hans hat geschlafen und Peter hat auch.  
 Hans has drive home and Peter has too (Lobeck (1999))

ここで、重要になってくるのは、ドイツ語では英語の助動詞に相当する語でも直接目的語をとることが可能であるという事実である。

- (11) Was möchten Sie  
 what might you  
 'What would you like?'

つまり、ドイツ語の動詞類は、いわば、現代英語の助動詞の性質と一般動詞の性質をあわせもっているといえるのである。

現代英語の助動詞が $\Sigma$ 素性をもっていると島田が仮定していることはすでに紹介した。一般動詞に関しても島田はある仮定をしている。島田は Roberts (1998) に従い、意味役割付与能力を一般動詞特有の性質と認定し $\theta$ 素性なるも

のを担っていると仮定しているのである。 $\theta$ 素性をもっているということが意味役割付与能力があることを保証していることになる。まとめると、現代英語の述語類は次のように分類できる。

- (12) a. 助動詞 —  $\Sigma$ 素性を持っている  
 b. 一般動詞 —  $\theta$ 素性を持っている

一方、ドイツ語はすべての動詞類が現代英語の助動詞と一般動詞の性質をあわせもっているので、島田はこのことを、すべての動詞が $\Sigma$ 素性と $\theta$ 素性の両方をもっている、と仮定することで捉えようとした。

- (13) ドイツ語の全動詞 —  $\Sigma$ 素性と $\theta$ 素性をもっている

島田によれば、このように考えるとドイツ語でなぜ動詞句削除構文が見られないかを容易に説明できるという。説明の関係で (9) を再掲する。

- (9) a. John loves Nancy and Bill does, too.  
 b. [<sub>TP</sub> Bill T( $\Sigma$ ) [<sub>VP</sub> e ]]

現代英語ではTの $\Sigma$ 素性を削除すべく、この場合はdoであるが、助動詞が挿入された。一方、ドイツ語では動詞はすべて $\Sigma$ 素性を持っているので、英語のloveに相当するドイツ語の動詞語が挿入されて動詞句削除構文が派生してもよさそうであるが、実際は不可能である。動詞句削除の場合、(9)に示されているように、Tの $\Sigma$ 素性を削除するため動詞類は直接Tに挿入される。ここで注意しなければならないのはTは機能範疇であるということである。Robertsによれば、 $\theta$ 素性を持っている動詞は意味役割を付与しなければならないという制約のため、機能範疇には基底生成できないという。島田はこの考えを採用し、ドイツ語の動詞類は $\Sigma$ 素性もになっているが、同時に $\theta$ 素性もになっているためTに直接挿入されることが不可能なので、ドイツ語では動詞句削除構文が見られないと説明している。

以上見てきたように、島田の分析はおおよそ次のようにまとめられる。

- (14) a. 疑問文, 否定文, 動詞句削除構文を形成する機能範疇は解釈不可能な

Σ素性を担っている。

- b. 現代英語の助動詞はΣ素性、一般動詞はθ素性をもっていて、ゆえに、現代英語では疑問文、否定文、動詞句削除構文を形成する機能範疇がもっているΣ素性を削除するのに助動詞が用いられる。
- c. ドイツ語ではすべての動詞がΣ素性とθ素性の両方を持つ。したがって、疑問文、否定文における機能範疇のΣ素性削除にはすべての動詞が使用可能となる。
- d. ドイツ語で動詞句削除構文が見られないのは、すべての動詞がΣ素性だけでなくθ素性も持つため、機能範疇TのΣ素性を削除すべく直接Tに挿入することができないからである。

この分析を踏まえて、次節では Okazaki (2002) の観察を概観する。

### 3. Okazaki (2002)

現代英語では動詞とそれにつづく to 不定詞の to が縮約されて発音されることがある。want to が wanna と発音される Wanna 縮約は特に有名である。

(15) I want to go there. → I wanna go there.

Okazaki は現代英語の「動詞 + to」の縮約形が統語的、意味的に興味深いふるまいを示すことを指摘している。具体的にいうと、to と縮約した動詞がもともと一般動詞であるにもかかわらず、縮約の結果、縮約形全体であたかも助動詞のような分布を示すというのである。しかも、その分布の仕方が完全な助動詞のそれと必ずしも一致するとは限らず、直感的には、半一般動詞、半助動詞ともいえる要素になることが指摘されている。この節ではこの okazaki の観察を概観する。

ここでとりあげる縮約形は次の4つである。

- (16) a. want to → wanna
- b. have to → hafta
- c. used to → usta
- d. (have) got to → gotta

これらはすべて一般動詞が to と縮約する例である。もともとは一般動詞であるから当然、疑問文、否定文、動詞句削除構文において助動詞の挿入が必要になるはずである。しかしながら、Okazaki は次のような観察をしている。

## (17) 疑問文

- a. \*Wanna you go there?
- a'. Joo wanna go there? (Joo=Do you)
- b. \*Usta you go there?
- b'. Dijoo usta go there (a lot)? (Dijoo=Did you)
- c. \*Gotta you go there?
- c'. Do you gotta go there?
- d. \*Hafta you go there?
- d'. Do you hafta go there?

## (18) 否定文

- a. I {don't wanna/\*wanna not} go there.
- b. I {didn't usta/usta not} go there.
- c. I {don't gotta/gotta not} go there.
- d. I {don't hafta/hafta not} go there.

## (19) 動詞句削除

- a. ?John wants to swim, and I wanna, too.
- b. John usta swim in the river, and I usta, too.
- c. John's gotta swim in the river, and I gotta, too.
- d. John hasta swim in the river, and I hafta, too.

これらの例が物語っているのは、問題となっている縮約形が一般動詞とも助動詞ともとれるふるまいを示めすことである。(17)の疑問文のデータからわかることは4つの縮約形すべてで助動詞の挿入が必要なことである。もともと一般動詞であることを考えれば、これは当然の結果である。(18)の否定文に関しては少々複雑である。wanna は助動詞の挿入が必ず必要であるが、残りの3つの縮約形ではそれ自身が否定辞に先行することも可能であることがわかる。これは助動詞のもつ性質で、本来、一般動詞ではありえないことである。(19)の動詞句削除では4つの縮約形すべてがこの構文に生じることがわかる。これも助

動詞のもつ性質で、本来、一般動詞であればありえないことである。

Okazakiによれば、疑問文においては助動詞としての働きは見られないものの、否定文や動詞句削除構文では助動詞として機能することが散見され、したがって、この4つの縮約形は完全ではないものの助動詞化しているという。これは、例えば、*usta* は *would*、*hafta* は *must* といったように助動詞の意味とかなり類似しているため、助動詞へと文法機能が変化しているからだというのである。また、この文法機能の変化の進度、度合いは縮約形で異なっており、4つの縮約形のなかでは否定文で否定辞に先行することができない *wanna* が一番助動詞化が遅れていることになる。次節ではこれらの事実が島田 (2004) でどのように扱われるかを考えることにする。

#### 4. 助動詞化再考

現代英語では疑問文、否定文、動詞句削除構文とも同じ種類の動詞で認可されるにもかかわらず、ドイツ語ではそうならず問題となるところであるが、島田ではこのことは $\Sigma$ 素性、 $\theta$ 素性にもとづく分析で説明されていた。このように異言語間にみられる差異が島田では扱われていたわけだが、現代英語という同一言語内でも上記3構文すべてを認可できる述語もあれば、すべてを認可できないわけではない縮約形という述語もあるという非均一性があることがOkazakiによって指摘された。本節では現代英語内にみられるこの非均一性が島田の分析でどのように処理されるかを見ていくことにする。

##### 4.1. 動詞句削除構文

まず、(19)の動詞句削除構文をとりあげ、ここから論を展開していく。よく知られているように、本来、縮約が起こるとその直後に空の要素は生起しない。例として、Okazakiから *plan to* のデータを引用する。

(20) They plan to go there alone, and I plan to [VP e], too.

*plan to* が縮約形で発音されなければ(20)は動詞句削除構文として容認されるが、縮約して発音されると非文法的と判断される。島田に従えば、空のVPをとっている不定詞補文のTには $\Sigma$ 素性があり、それは削除されなければならない。よって、縮約しない *to* は $\Sigma$ 素性を削除する助動詞的要素となるが、縮約し



て *plan* といっしょになると  $\Sigma$  素性は削除できないということになる。

ところが、すでに概観したように、Okazaki では *wanna*, *usta*, *gotta*, *hafta* の場合は動詞句削除が可能になることが指摘されている。これらはそれぞれ自身助動詞として機能し、動詞句削除を可能にさせるというのが Okazaki の洞察であった。一方、*plan to* の縮約は純粹に音韻レベルのことで助動詞への文法化という統語的、意味的变化を起こしているものとは異質であると考えている。これらの現象は  $\Sigma$  素性をもちいた分析ではどのように説明されるのであろうか。

疑問文、否定文、動詞句削除文の意味を保証する  $\Sigma$  素性は機能範疇にある場合最終のインターフェイスレベルで解釈不可能なのでそのままの形では存在しえない。助動詞が挿入され削除されるというのは、いわば、機能範疇の  $\Sigma$  素性を語彙化し、ヒトにとって認識可能な要素にする、無害化する、ということである。*wanna* の動詞句削除構文の構造を考えてみる。

(21) I want [<sub>CP</sub> [ T(  $\Sigma$  ) [<sub>VP</sub> e ] ] ]

ここで T に *to* が挿入されれば、これまでみてきたように直接的に  $\Sigma$  削除が果たされる。*wanna* であっても動詞句削除構文が可能になるということは、(21) においてもう一つ  $\Sigma$  素性無害化の方法があるということの意味していると本論では考えることにする。その方法とは T( $\Sigma$ ) の *want* への編入である。Baker (1988) では名詞が格付与の条件を満たす方法の一つとして、名詞の編入が提案されている。近年、格も素性という概念でとらえられており、名詞が持つ格素性は解釈不可能でそれは削除されるものであるという分析がある。Baker のように名詞が別の要素に編入することで格に関する条件を満たせるのであれば、これはすなわち、編入によって名詞の格素性が削除、あるいは無害化されたことを意味する。それと同じように、T( $\Sigma$ ) も *want* という動詞に編入されることにより無害化されると考えるのである。*wanna* という語形は、結局、*want* と T( $\Sigma$ ) の結合形なのである。よって、本論文では次のように提案する。

(22) 縮約形が動詞句削除構文に生じるのは T( $\Sigma$ ) がもとの動詞に編入することによって  $\Sigma$  素性の無害化が果たされているからである。

注意しなければならないのは、T( $\Sigma$ ) はどの動詞への編入によっても  $\Sigma$  素性の無害化が図れるわけではない、ということである。(20) にあるように、*plan*

では $\Sigma$ 素性は無害化できない。この動詞の選択については、Okazakiも指摘しているように意味的側面が関係しているものと思われる。「動詞 + to」の持つ意味が既存助動詞の意味と似ている場合にのみ(22)の方法が利用可能なのである。ここでは詳細には立ち入らず、このような動詞の選択条件があることを特に議論せず受け入れておく。

## 4.2. 疑問文及び否定文

問題となっている4つの縮約形が動詞句削除構文に生じる仕組みについては4.1節で論じた。その仕組みで疑問文、否定文での生起条件はどのように説明できるかを考えるのが本節の目的である。まず否定文から考えてみる。データを整理すると次のようになる。

- (23) wanna は必ず助動詞が必要になるが, usta, gotta, hafta は助動詞を用いる型と自身が助動詞のようにふるまい否定辞に先行する型の2種類の生起の仕方がある。

ここでは、まず、自身が否定辞に先行する例から論じる。具体例を再掲する。

- (24) a. \*I wanna not go there.  
 b. I usta not go there.  
 c. I gotta not go there.  
 d. I hafta not go there.

(24a) の wanna をのぞいて、否定辞に先行することが可能である。つまり、それ自身あたかも助動詞であるかのようにふるまっている。2節で現代英語の助動詞は $\Sigma$ 素性を持つものであることを指摘した。この考えを受け入れると, usta, gotta, hafta も $\Sigma$ 素性をもつことになる。このことは4.1節の、縮約形はT( $\Sigma$ )が動詞に編入されて形成されたものである、という分析から直接的に導かれる。つまり、(24)の usta, gotta, hafta は $\Sigma$ 素性の編入を受けているので、それ自身 $\Sigma$ 素性を持ち、その結果、助動詞としてのふるまいが可能になっているのである。(24)は動詞句削除構文ではないが、不定詞補文が選択されていることに注目すべきである。不定詞補文とは、それを定形でおきかえると助動詞の should など表現される場合が多い。to は、いわば、should のような動

動詞と同じであり、それが編入されて、*usta*, *gotta*, *hafta* になっているとすれば、それらが全体として助動詞としての機能を持っていてもおかしくはない。(24a)の非文法性については少し考察が必要になる。*wanna*が前置する前の構造を次に示す。

(25) [<sub>TP</sub> T(Σ) Neg [<sub>VP</sub> *wanna*(Σ) [ go there]]]

(25)の *wanna* も Σ 素性をもった助動詞の編入を受けているはずである。ゆえに、主節の T の Σ 素性を削除すべく移動してもよさそうである。しかし、データから考えてみるとそれは不可能であるといわなければならない。*wanna* の Σ はもともと補文不定節の T のものであった。この *wanna* が否定辞に先行するというのは、主節の T に挿入されることを意味する。ここで考えられることは、動詞に編入された Σ 素性が有効に働くには、ある種の局所性条件をみたさなければならない、ということである。*wanna* に限っていうと、補文の T に由来する Σ 素性はそれ以外の機能範疇では不可視になってしまうと考えられる。*wanna* は完全に語彙化された助動詞ではなく、Okazaki の言葉を借りれば、*modal-like elements* ということである。これは、助動詞として機能するには局所性の条件といったある制限をうけなければならない派生形の述語であるということの本論ではとらえることになる。これ以外の3種類の縮約形にはこれほど厳しい条件はなく、階層構造上一つ上の T 内でも Σ 素性は可視的なのである。

疑問文に話を進める前に、助動詞が必要になる否定文型にも言及しておく。具体例を再掲する。

- (26) a. I don't *wanna* go there.  
 b. I didn't *usta* go there.  
 c. I don't *gotta* go there.  
 d. I don't *hafta* go there.

(24)の説明は単純である。これらの縮約形は性質としては一般動詞である。4.1節で *plan to* の縮約形は統語的、意味的变化をとまなわない純粋に音韻的変化だけを受けたものであると論じたが、(26)の縮約形もその型なのである。おなじ *usta* という語形でも、Σ 素性の編入のあるタイプとただの音韻変化を受けたタイプの2種類が存在し、後者の場合は一般動詞としてしか機能せず、よっ

て (26) にみられるように do の挿入が必要になるのである。ちなみに、動詞句削除構文の場合も後者の派生はありうるのであるが、結果として、このタイプの場合は plan to の縮約形が許されないと同じ理由で排除される。

次に疑問文について論じることにする。まず、データをまとめると次のようになる。

(27) 疑問文では縮約形は助動詞として機能しない。

具体例を次に再掲する。

- (28) a. \*Wanna you go there?  
 b. \*Usta you go there?  
 c. \*Gotta you go there?  
 d. \*Hafta you go there?

(28) にみられるように、縮約形は疑問文形成に際して主語と倒置することはない。もし縮約形が  $\Sigma$  素性が編入されたものであるとすれば、当然助動詞として機能し倒置を起こしてもいいはずであるが、データを見る限り疑問文ではそうなっていない。

否定文における wanna とそれ以外の縮約形のふるまいの違いを局所性の条件で説明したが、この疑問文の問題も同じように解決できる可能性がある。つまり、縮約形に編入された  $\Sigma$  素性が可視的であるためにはある局所性の条件を満たさなければならない、という制約がここでも関係しているのである。疑問文で主語との倒置をする前の構造を次にあげる。

(29) [<sub>CP</sub> C( $\Sigma$ ) [<sub>TP</sub> you usta [<sub>TP</sub> [VP go there]]]

主節 C の  $\Sigma$  素性を削除することが必要であるが、もし usta が不定詞補文の  $\Sigma$  素性の編入を受けているのであれば usta が C に移動して素性削除をできるはずである。それが不可能ということは主節 C のレベルでは usta に編入された  $\Sigma$  素性は不可視であることを意味する。否定文に関する議論で触れたように、usta は主節の T においては助動詞として機能できる。つまり、 $\Sigma$  素性はここでは可視的である。しかし、疑問文で倒置不可能ということはその T の上に位置してい

るCは $\Sigma$ 素性を可視的にするには遠すぎるということである。縮約形の $\Sigma$ 素性は補文のTに由来している。主節のTのさらに上まではその効力を及ぼすことができないということであろう。この点については4種類の縮約形すべて同等である。

以上をまとめると次のようになる。

- (30) a. 縮約形に挿入された $\Sigma$ 素性が可視的であるためには局所性の制約に違反してはならない。  
b. 局所性の制約には2種類ある。1つは、上位節の機能範疇の位置では不可視となる、というもので、もう一つは上位節のTをこえた位置では不可視となる、というものである。前者は *wanna* について、後者は *usta*, *gotta*, *hafta* についてあてはまる。

## 5. まとめ

本論文では島田 (2004) の分析を踏襲し、Okazaki (2002) によって指摘された現代英語の縮約形の助動詞化について論じてきた。縮約形が助動詞的に機能する場合があるのは、縮約形が補文の $\Sigma$ 素性が編入されてできた形式であるからと提案した。さらに、完全に助動詞として機能しないのは、語彙として確立された助動詞ではなく、統語レベルで編入により派生的に形成されたものであり、編入された $\Sigma$ 素性が可視的であるための局所性の条件があるからとも提案した。島田では異言語間の問題を取り扱ったが、同一言語内にみられる助動詞性に関する特性もある程度分析できることが示されたといえる。

今回の分析からいえることは、縮約形の助動詞化とはそれが純粋な助動詞に近づくことを必ずしも意味するわけではない、ということである。今回扱った縮約形のもとになっている述語は *want*, *use*, *get*, *have* といった一般動詞である。一般動詞が助動詞化するというのは、相補的な性質をもった要素、つまり、 $\Sigma$ 素性だけを担っている述語への変化ではないということである。縮約形は $\Sigma$ 素性の編入であるという本論文の分析は、一般動詞の特性と助動詞の特性をあわせもった要素の出現を意味する。 $\Sigma$ 素性と $\theta$ 素性の両方をもっているドイツ語の動詞類の性質に現代英語の縮約形の性質は似ているのである。英語史上の時代をさかのぼると英語もドイツ語と同じく動詞類はすべて $\Sigma$ 素性と $\theta$ 素性をあわせもっていたことが島田で指摘されている。英語史上で起きた変化という

のは、 $\Sigma$ 素性と $\theta$ 素性がそれぞれ助動詞、一般動詞というように形態的に独立してあらわされるようになったことである。したがって、今回見てきた縮約形にはこの歴史の逆の現象、つまり、 $\Sigma$ 素性と $\theta$ 素性の一体化がみてとれるのである。このように大きな史的变化とは逆のことがおきていると考えると、縮約形の助動詞性が非常に不安定であるという Okazaki の指摘はきわめて自然にうけとれる。局所性の条件がどこから導かれるのか、どのような動詞に $\Sigma$ 素性の編入があるかなどは、今後検討するべき課題として残されていることはいうまでもないが、形式的な助動詞性のありかを解明する試みに対して縮約形の示す現象を考察することは意義のあることと考えられる。

#### 参考文献

- Baker, M. 1988. *Incorporation*, MIT Press, Cambridge, MA
- Laka, I. 1990. *Negation in Syntax*. Doctoral Dissertation, MIT.
- Lobeck, A. 1999. VP Ellipsis and the Minimalist Program: Some Speculations and Proposals, in S. Lappin and E. Benmamoun (eds.), *Fragment: Studies in Ellipsis and Gapping*, 98-123, Oxford University Press, Oxford.
- Okazaki, M. 2002. Contraction and grammaticalization, *Tsukuba English Studies* 21, 19-60.
- Roberts, I. 1998. HAVE/BE Raising, Move F and Procrastinate. *Linguistic Inquiry* 29, 113-125.
- Solà, J. 1996. Morphology and Word Order in Germanic Languages. in W. Abraham et al. (eds.), *Minimal Ideas: Syntactic Studies on Minimalist Framework*. 217-251, John Benjamins, Amsterdam.
- 島田雅晴. 2004. 動詞的虚辞に関する諸現象：普遍文法の観点からの分析. 博士論文. 筑波大学